

76. 諸種疾患における Resin Sponge Uptake の検討 (誌上)

一とくに糖尿病患者の RSU について—

○菊池弘明 松永藤雄 下山 孝
伊藤 隆 佐藤 東
(弘前大学 松岡内科)

甲状腺疾患, 肝疾患, 腎疾患および糖尿病等種々疾患患者の RSU を検討したので報告する. 正常者11名におけるわれわれの正常値は25~36%であり, これまでの報告と考え合わせて25~40%を正常として検討を加えた.

各種甲状腺疾患の間には overlap が少なく, きわめてよくその機能状態を反映しており, 従来の報告どおり鑑別診断上有力な手段となりうる. 肝疾患のうち肝硬変症ではやや高値のものがみられ, 一方肝炎では正常または低値であった. ネフローゼ症候群を主とする腎疾患では高値であった.

糖尿病患者の RSU に関する報告は少なく, 一般に低下すると思われているが, われわれの経験では高値をとる傾向があった. 今回はこの点をさらに症例を増して詳しく検討発表する.

諸種疾患における RSU 値について, これまでわれわれが測定しえた症例は303例である.

その内訳は甲状腺疾患138例(甲状腺機能亢進症治療前のも76例, 治療後13例, 機能低下症治療前18例, 治療後3例, 単純性甲状腺腫34例, 亜急性および慢性甲状腺炎それぞれ2例), 肝疾患16例(肝炎10例, 肝硬変症6例)腎疾患7例(慢性腎炎1例, ネフローゼ症候群6例)糖尿病67例, 妊婦11例, その他の疾患53例, 正常11例である. 上記疾患それぞれにおける RSU 平均値とその分布範囲は甲状腺機能亢進症治療前50.0% (30.6~75.7), 同治療後35.6% (27.0~40.0), 機能低下症治療前23.2% (19.8~26.0), 治療後43.5% (30.2~57.0), 単純性甲状腺腫32.9% (25.1~46.0), 亜急性甲状腺炎62.8% (65.9~69.6), 慢性甲状腺炎30.4% (28.2~32.6), 肝炎28.9% (20.0~34.4), 肝硬変症30.3% (24.1~45.2), 腎疾患43.4% (36.7~56.7), 糖尿病37.5% (24.4~73.6)であった. われわれは RSU 値の正常値を25~40%としており, これに従って検討すると, RSU 値は甲状腺機能亢進症, 亜急性甲状腺炎等に高く, 妊娠, 甲状腺機能低下症で低いことは従前通りである. 糖尿病における RSU 値については Hamolsky が $^{131}\text{I-T}_3$ 赤血球摂取率により不変またはわずかに変化

するとしているが, われわれの症例では正または高値を呈し, 血糖値との関係をみると血糖値が高い程 RSU 値が正常化していく傾向がみられた. 症例を増して検討する必要がある. RSU 値と BMR との相関をみると相関係数+0.65 で推計学的に有意の相関がみられたが, ^{131}I 摂取率との間に相関はなかった.

追加: 中川昌壮(岡大 小坂内科) <小山田先生へ> 治療量の ^{131}I 投与後の患者血清中の radioactivity は検査量投与時のそれとは異なり相当の量に及ぶと考えられる. われわれはダイナボットより提供された nonradioactive T_3 (triosorb kit T_3 と equivalent dosis のものを治療患者血清添加により検討したが ^{131}I 投与後間もなくは inorganic iodine が大量のため resin sponge uptake は60%以上になるが, 4W 経過してもなお10%をこえる serum 中の radioactivity の resin sponge uptake があることは無視できないと考える.

補正式をうるまでにはいならずまた PB^{131}I conversion ratio との関係はまだ明らかでない.

〔トリオソルブ異常高値が発見動機になった TBC 欠損減少症の一家系について〕

20才男性で初め理学的所見, 検査成績 (B.M.R. + 58.0, ^{131}I uptake 84.6%, $^{131}\text{I-T}_3$ RSU 64.0, S-cholesterol 140mg/dl)でも明らかな hyperthyroidism の一症例に対し propylthiouracil にて治療開始しまもなく理学的所見, $^{131}\text{I-T}_3$ RSU を除く諸検査が改善したにもかかわらず, $^{131}\text{I-T}_3$ RSU が55~60%の異常高値をつづけ, その特異な経過より thyroxine binding protein の異常を考へて $^{125}\text{I-T}_4$ と serum との mixture の cellulose-acetate 膜電気泳動にて normal に対し $\alpha_1\alpha_2$ globulin の部の radioactivity を認めず T.B.G. 欠損あるいは bindig activity の欠損と考え Dr. Tauxe の suggestion もあって家系調査を行なったところ, 母系に2名の欠損, 2名の減少を認めた. 全例 PBI は低値 (2~3.5r/dl) $^{131}\text{I-T}_3$ RSU は高値 (56~62%) を低し, radio-chromatoscintigram にても $\alpha_1\sim\alpha_2$ globulin の peak を認めないか, ごく軽症であり, TBG の R.A./total R.A. の ratio も低値を示した.

TBG 欠損ないし減少症の家系的発生は本邦第1例と考え, ここに追加する.

*